

Topics

第11回ACNフォーラムが開催 増養殖の関係者が一堂に会し積極的に意見交換

NPO法人ACN（アクアカルチャーネットワーク）は、8月25日、26日の2日間、福岡市のホテルニューオータニ博多において「第11回ACNフォーラム」日本の水産増養殖を考える会」を開催した。同フォーラムは、増養殖業者間の情報交換やビジネスの交流の場として開催しているもの。これまで「ACN種苗フォーラム」として行っていたものを、種苗についてだけではなく広く増養殖業について考える場にしようという意図より現在の名称に改めての開催であった。

まず最初に、田嶋猛理事長があいさつ。「韓国ではコンブを利用したアワビ養殖で御殿が建つなど隆盛を迎えています。また、中国では魚種の多角化が始まっています。インドネシアやタイ、マレーシアなどでは、エビ養殖だけではなくハタ養殖などが取り組まれています。こうした状況の中で日本だけがちょっと厳しい状況が続いていますが、養殖は大き

なビジネスであり、儲かるビジネスだと思っています。この長い冬の状況を耐えてこそ来るべき春に伸び上がると思っております」と、養殖業の将来性を強調した。続いて、(有)湊文社の池田成己氏が来賓として祝辞を述べた。

開会式が終わると早速講演会が行われた。この講演会には、種苗生産、養殖業、流通業という3つの異なる立場の講師が招かれており、それぞれの立場からの話題が提供された。

最初に、近畿大学水産研究所の村田修教授が種苗生産の現状と将来について講演を行った。ここで村田教授は、マダイ選別育種の経緯、マグロ種苗生産で生じる問題点と克服方法など、近畿大学がこれまでに研究、技術開発を進めてきた種苗生産について話した。

また、今後の課題として①安定生産、②健苗生産に向けての開発、③種苗生産された稚魚の出荷選別基準と合理化、④これからの品種改良、

⑤クロマグロ人工種苗の安定生産、⑥新養殖魚種はもう無い？、⑦種苗の価値は汗水流した養殖技術開発から、の7つを提起。これからは利益に加えて、おいしい、安全や健康といった面も考えていかなければいけないことを強調した。

次いで、全国海水養魚協会の岩切学前会長が養殖業の現状について講演を行った。岩切氏は、持続的養殖生産確保法に関する取り組みについて、自身が会長を務めていた当時の状況を振り返りながら説明した。

また、養殖業が抱えるさまざまな問題を紹介。食料自給率の向上に養殖業が担う役割は大きく、計画生産・計画出荷に取り組んでいくことが大切であることを訴えた。

養殖魚の流通については、グリーンコープ連合の河野徹企画本部長が講演した。河野氏は、店頭に並ぶ魚の原価率や売り場担当者の考え方など、流通のメカニズムについて紹介。歩留りや手間を考えると現在の魚の価格になってしまいう現状を分かりやすく説明した。

河野氏は、養殖魚を共同購入に盛り込むために生協の会員を対象に養殖魚についての意識改革に取り組んだ経験があるそうだ。直接消費者と交流を行ったという体験から、「消費者サイドに生産者の情報が少なすぎるのでは。情報開示を上手に行っ



台風の接近と時期が重なったもの大勢が参加した。

たり、生産者自身が売り場に立つて説明したりすることが今後は必要」という意見を提案した。

講演が終わると、その講演への質疑応答を中心とした総合討論が行われた。参加者から「中国の養殖業の現状について教えてほしい」、「無農薬にすることでどれくらい価格を上げられるのか」といった質問が次々と飛び出し、会場が一体となって業界で生じている問題に対して意見を交わし合った。同フォーラムでは、展示会も開催された。講演会の隣に設けられた会場には、ACN会員がブースを設置。会社PR・製品紹介が実施された。26日には出展者による発表会が行われ、講演会とはまた違った形での情報交換がなされていた。